キナウル語（パンギ方言）の時制接辞について*

髙橋　慶治
ytashi@for.acihi-pu.ac.jp

1　はじめに

本稿の目的はキナウル語の時制接辞について記述することである。筆者はこれまでキナウル語を記述、分析してきたが、その多くの時間は動詞形態論の研究に費された。本来は、動詞形態論全体についての記述を試みるべきであるが、いまだ分析が不十分な点もあり、本稿では時制接辞のみを扱う。なお、これまでキナウル語動詞形態論の全体を示していないため、ここでの議論に必要な概念については、本節に説明し、それ以外にも適宜脚注で示す。

キナウル語の動詞句構造を定形と非定形に分ける。動詞句構造のうち、定形を以下のように示す:

(1) (NEG-)V_{stem} (-O)-TNS-S(-QM)

動詞語幹は、母音語幹動詞、子音語幹動詞、D-語幹動詞、擬似中動態語幹に分かれる。母音語幹動詞は動詞語幹が母音で終わる。子音語幹動詞は、動詞語幹が *-d* 以外の子音で終わるものであり、*-d* で終わるものを D-語幹動詞という。また、中動態接辞と同じ形式の語幹末を持った動詞を擬似中動態語幹と呼んでおく。この語幹は、意味的にも中動態に類似しているが、中動態接辞と同形式の部分を取り除いたとき、まったく異なる意味の動詞になったり、またはその形式自体がなかったりする。否定辞は、動詞語幹に前接し、目的語人称接辞[1]、時制接辞、主語人称接辞、疑問標識の順で動詞語幹に後接する。この構造において、括弧内の項目は現れなくて

* 本稿は、これまで受けたさまざまな科学研究費補助金の成果の一部である。とくに、動詞形態論を中心とする研究テーマで受けた科学研究費補助金基盤研究 (C)（#12610556、2000–2003 年度、「キナウル語の記述および形態統語論的研究」、研究代表者; #16520250、2004–2007 年度、「キナウル語の現地調査による記述および形態統語論的研究」、研究代表者）、基盤研究 (S)（#16102001、2004–2008 年度、「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読」、研究代表者: 長野泰彦 国立民族学博物館教授）、基盤研究 (B)（#21320085、2009–20012 年度、「南アジア諸言語の類型論的研究—南アジア言語領域論の再検討」、研究代表者: 長田 俊樹 総合地球環境学研究所教授）など、および、所属大学から受けた研究費によって行われた調査での資料を中心とする。調査は、1997 年以降、ほぼ毎年 1 回ないし 2 回、それぞれ数週間程度行ってきた。この間、筆者の執拗な質問に根気よく答えてくれたインフォーマントの Ravinder Singh Negi 氏に感謝の意を表する。また、氏とともにつねに変わらぬ好意で筆者を受け入れてくれる、氏の家族に感謝の意を表したい。

[1] 目的語人称接辞の位置には、中動態の接辞なども現れる。

もよい。したがって、動詞の定形は、動詞語幹に時制接辞と主語人称接辞を伴うものである[2]。

非定形は時制接辞と主語人称接辞を伴わない。非定形には、不定詞[3]、O-状態形[4]、ts-状態形[5]、重複形[6]の 4 つの形式がある。非定形のうち、不定詞を除く 3 種の形式は繋辞とともに使われて、相と時制を表す複合的な形式を作る。これは、完了や継続の意味を持つ事態を時間軸上のどこか（つまり、過去、現在、未来）におく用法である[7]。非定形や相と時制を表す複合的な形式の詳細については別稿を準備したい。

(1) で見たように、時制接辞は、目的語人称接辞に後続し、目的語接辞がなければ動詞に直接付加される。このスロットに入る接辞は次の通りである。

(2) 現在: *-udu, -odu, -tu*
過去: *-a, -e*
未来: *-to, -o*
不確実: *-gyo*
反実仮想: *-tsa*
要請: *-ri*

一般的には、「未来」「現在」「過去」が時制に属するものであり、「不確実」uncertainty、「反実仮想」subjunctive、「要請」request は時制ではなく法と考えられる。しかし、キナウル語では、本稿で示すように、「不確実」「反実仮想」「要請」を表す接尾辞が、「未来」「現在」「過去」を表す接尾辞と同じ分布を示すことから、これらの 6 つを形式的に一つの接尾辞グループとして扱うことにする。

なお、Sharma (1988) は時制と相を pp. 136–48 で扱っているが、その記述はかなり複雑であり、分析は不十分であると言わざるをえない。その原因は、時制を形式ではなく意味的にとらえ、時制と相を同時に扱っているからであると言える。とくに時制と相を表す複合的な形式を無批判に列挙することは混乱を招くことになる。本稿では、複合的な形式は扱わず、キナウル語の動詞の形態変化をできるだけ単純に扱えるように、形式的に時制接辞スロットと考えられるスロットに現れる接辞のみを扱うことにする[8]。

---

[2] 人称接辞については、髙橋 (1999)、 Takahashi (2004, 2008) などを参照されたい。

[3] 動詞語幹に *-(i)m* を付加する。英語の to-不定詞と同様の用法があり、動詞の補語として用いられる。

[4] 動詞語幹に接尾辞 *-ō* を付加し、継続相を表す。

[5] 動詞語幹に接尾辞 *-ts* を付加して形成される。筆者の以前の論文では、中立時制 neutral tense としたが、現在は適切ではないと考えている。意味や用法についてはいまだ十分に明らかではない。

[6] 完了相を表す。動詞語幹の全部または一部を繰り返すことによって形成される。動詞語幹が 1 音節であれば全体を繰り返すが、2 音節の場合は、第 2 音節のみを繰り返す。3 音節以上をもつ動詞語幹は今のところ見付かっていない。

[7] その一部については、髙橋 (forthcoming) を参照されたい。

[8] Sharma (1988) の記述は混乱しているものの、きわめて多くの情報をもたらしている。この貴重な情報を利用しにくくしているのはまことに遺憾なことである。本稿の記述が、Sharma のものと一致しない場合があるのは、調査対象の方言が異なる場合があるからということも考えられ、Sharma が間違っていると言うつもりはない。

2　いわゆる時制を表す接辞

本節では、一般的に「時制」と呼ばれる意味を表す接辞を扱う。ここでの時制は相対的ではなく、発話時点を基点とする絶対的な時制である。

2.1　現在時制

現在時制は、動詞が発話の時点で行われつつあることを示す。いわゆる「現在進行形」である。したがって、厳密には相の意味をもっている。

現在時制を表す接辞には、*-udu, -odu, -tu* などの異形態がある。*-udu* を基底の形式と考える[9]。 *-odu* は先行する動詞語幹の末尾が非高母音のときに現れる。また、*-tu* は D-語幹動詞に現れる[10]。

(3) a. *bārī*　*mī-gā*　*santaṅ-ō*　*gitaṅ-ā*　*lan-**udū***
many　person-PL　shrine-LOC　song-PL　do-PR
'Many people are singing on *santaṅ*.'

b. *bārī*　*zigits*　*hoṅ-ā*　*almari-ō-č*　*bāraṅ*　*dwad-**tū***
many　small　insect-PL　shelf-LOC-ABL　outside　come_out-PR
'Many small insects are coming out of the shelf.'

上の例で示されているとおり、この形式が表す時制は現在のみである。過去や未来の進行、継続は、したがって、複合的な方法によって示される。次例に見られるように、この形式は、過去や未来を表す語とは共起しない。

(4) *gɨ*　*hunā/*mē/*nasom*　*huš-udu-k*
1PRN　now/yesterday/tomorrow　study-PR-1S
'I am studying now.'

この形式は、歴史的には *-u+du* と分析できるのではないかと思われる。*-u* は属格の接尾辞と、*-du* は繋辞の一つと同じ形式を持っている。しかし、共時的には、このように分析する根拠はない。とくに、後半部の *-du* は、繋辞の一つと同形式であるが、現在を表すこの形式では過去形にならない。すなわち、繋辞の *-dū* が過去形として *-duē* を持っているのに対し、*-udu* は *-udue* のような形式にならない。したがって、繋辞とは異なる分布を示していると考えるべき

---

[9] キナウル語では、開音節で語末母音が音声的に長く具現する。実際には、開音節で終わる単語の語末母音が音韻論的に長いか短いかを確定することは難しいが、基本的には、接尾辞が後接して短母音になる場合は、基底形で母音が短いと考えることができる。

[10] D-語幹動詞の形態変化は、他の子音で終わる語幹とは異なっている。(3b) では、動詞語幹末の *-d* は接尾辞 *-tū* の初頭子音と同化して *dwattū* のように発音される。D-語幹でのこのような形態変化の詳細はかならずしも明らかではない。*dwad-udu-* という基底形から現在時制接辞の初頭 *-u* が脱落する音韻論的および形態論的プロセスの条件が明らかではないからである。ここでは、D-語幹動詞の直後の形態素境界で高母音 *i, u* が脱落する可能性があることを指摘するにとどめる。

である[11]。

2.2　過去時制

過去時制は、過去における行為や状態を表す。

過去時制接辞には、*-a* と *-e* の 2 種類の異形態がある。また、母音語幹動詞には、これらの接尾辞なしで、主語人称接辞が直接動詞語幹に付加され、D-語幹動詞では、語幹末の *-d* が脱落することがある。*-a* が基本的な形態と考えられるので、基底の形式は *-a* とする。

(5a) では、*-a* が用いられている。「与える」という意味の動詞 *kē-* は、不定詞で語幹は母音で終わっているが、過去形では子音が現れる。(5b) では、*-e* が過去を表しているが、中動態の接尾辞 *-ši* などの後ろでこの形が現れる。*-e* の分布については、Takahashi (2008: 51–54) を参照されたい。

(5) a. *boā-s* *aṅ* *raṅ* *hinā-pɨṅ* *ṭʰepaṅ* *ker-**a**-š*
father-INS my and PSN-DAT cap give-PT-3S(HON)
'The father gave a cap to me and Heena.'

b. *gɨ* *kim-u* *bāraṅ* *sū-š-**e**-k*
I house-GEN outside wash-MDL-PT-1S
'I bathed outside the house.'

c. *gɨ* *sukul-ō* *be-**o**-k*
I school-LOC go-PT-1S
'I went to school.'

(5c) の *beok* は不規則な形式である。この形式は *pʰī-*「持っていく」でも現れるが、*bī-*「行く」と *pʰī-* は自他対応していると考えられるので、この過去形の不規則性を説明するには資料が不足していると言わざるをえない[12]。

次の例は、母音語幹動詞が 3 人称の主語を取っている場合である。

(6) *aṅ* *čimē-s* *aṅ* *gasā* *čīd/*čī*
1PRN:GEN daughter-INS 1PRN:GEN clothes wash:VS+*d*/wash:VS
'My daughter washed my clothes.'

上の例では、動詞が末尾に *-d* を取らなければ不可となる。敬意を表す場合は、*čīš, čīaš* などのようになり、*čī-*「洗う」は母音語幹動詞である。母音語幹動詞では、このような *-d* が現れる場合があるが、その由来については不明である。

---

[11] なお、Sharma (1988) は *-udu* という形式をあげていない。Sharma (1988: 137–138) の 'Present continuous' で示されている形式 V-*ō to-/du-* がそれを含んでいると思われる。本稿の *-udu* とこの形式はきわめて類似しているが、分布が異なっている。Sharma は、*-udu* の後半部分を独立した繋辞とみなしていると考えられるが、本文で述べたように、この部分は繋辞とは異なる分布を示している。したがって、この形式は、本稿では扱わない複合的な時制/相と考えるべきものである。

[12] *bī-* の過去形については、Takahashi (2008: 57) で論じたが、じゅうぶんな解決を得たとは言えない。

D-語幹動詞では、規則的に過去形が作られるが、同時に語幹末の *-d* と過去の接辞 *-a* が脱落し、語幹母音が代償延長を起こすことがある[13]。次の例では、*sadak* と *bɨdak* が規則的な過去形であるのに対し、*sāk* と *bɨ̄k* は語幹末子音および過去を表す接辞の脱落とその代償延長による形式である。

(7) a. *gɨ-s* *sorgaṅ-ō* *yab-tseyā* *pyā-ga-nō-č* *id* *pyā* *sā-k/sad-a-k*
1PRN-INS sky-LOC fly-ATTR bird-PL-LOC-ABL one bird kill-1S/kill-PT-1S
'I shot one of the birds flying in the sky.'

b. *gɨ* *paṅē* *noliṅ* *bɨ̄-k/bɨd-a-k*
1PRN PLN last_year come-1S/come-PT-1S
'I came to Pangi last year.'

次の例は、過去形が *mē*「昨日」と共起するが、*nasom*「明日」や *deyarō*「いつも」と共起できないことを示す。

(8) a. *mē/*nasom/*deyarō* *huš-**e**-k*
yesterday/tomorrow/everyday study-PT-1S
'I learned yesterday/tomorrow/everyday.'

Sharma (1988: 140) は、キナウル語の過去形に直接観察（observed）と伝聞（reported）の 2 つの範疇があるとしている。Sharma の例を見ても、これらの区別がキナウル語で重要な役割を果たしているようには思われないが、Sharma (1988: 142) に *-gya* ～ *-gyo* という接尾辞が遠過去または伝聞過去を表すとされており、そのような区別がまったくないとは言えない。たしかに、3.1 節で見るように、*-gyo* が表す不確実な情報は、基本的に過去の事態であるという点で過去時制に含まれるとも言える。しかし、*-gyo* は時制スロットに入るものの、意味的には時制そのものとは言えないため、本節では扱わない[14]。

2.3 未来時制

未来時制は、未来においてなされる行為、達成される状態を表す。また、話者の想定、想像などある種のモダリティを表す。

未来時制接辞は、*-to*[15] と *-o* という異形態をもつ。*-o* は、目的語人称接辞または中動態接辞

---

[13] ここでは代償延長と述べておく。しかし、過去の接辞が、語幹末の*-d* とともに脱落して代償延長に寄与するのか、語幹末の *-d* が脱落したため隣接することになった語幹母音と融合して語幹母音が長音化するのかを決める根拠は、今のところない。しかし、次節で見るように、未来形でも動詞語幹末の *-d* が脱落して代償延長が起こるので、過去の接辞自体はこの母音の延長に直接関係していると考える必要はないと思われる。

[14] 4 節で見るように、時制は否定文で中和するが、モーダルな意味を表す接辞は現れるので、これらは異なる分布を示していると言える。

[15] Sharma (1988: 134) は *-t* を 3 人称目的語の接辞としている。実際には他動詞だけではなく自動詞にもこの形式が現れるので、3 人称目的語を表しているとは言いにくい。ただし、1/2 人称の目的語接辞や中動態接辞の後ろで、*-tō* ではなく *-ō* が用いられる事実は、*-t* が未来時制接辞に含まれないと

などを持つ動詞語幹（擬似中動態語幹を含む）に付加される[16]。たとえば、*sūši-*「（自分の体を）洗う」 の 1 人称単数未来形は *sūšok*「私は（自分の体を）洗う」 となる。*-to* はそれ以外の動詞語幹に付加される。たとえば、*čē-*「書く」の 1 人称単数未来形は *čētok*「私は書く」である。なお、D-語幹動詞では、語幹末の *-d* が脱落し、語幹母音が代償延長する。たとえば、*sad-*「殺す」の 1 人称単数未来形は、*sātok*「私は（彼を）殺す」である。

(9) は未来においてなされる行為を表している。

(9) a. *gɨ jɨṅ-č nasom bi-**to**-k*
I here-ABL tomorrow go-FUT-1S
'I will leave here tomorrow.'

b. *gɨ gasā lanč-**o**-k*
I clothes put_on-FUT-1S
'I will put the clothes on.'

(9) のように、意志的な動作を表すこともあるし、次例のように、未来についての予測、想像であることもある。

(10) *gɨ šī-to-k*
1PRN die-FUT-1S
'I may die.'

ただし、(10) は意志的であってもよい。したがって、「自殺する」という意味にもなりうる。

(11) は、話し手が 3 人称についての予測を行っている。

(11) a. *gɨ byaṅ-udu-k ādarš mɨntʰaṅ-u den-č yuā dā-tō*
1PRN be_afraid-PR-1S PSN roof-GEN top-ABL below fall-FUT
'I am afraid that Adarsh may fall down from the roof.'

b. *do-s bodī kamaṅ lanlan, do-pɨṅ on de-ō*[17] *nī-tō*
3PRN-INS very_much work do:RDP 3PRN-DAT hunger come-STT exist-FUT
'As he worked so hard, he must be hungry.'

以上見てきたように、現在および過去時制では、実際に実現しつつあるまたは実現した動作や状態を表すが、未来時制の場合には、まだ実現されていない動作や状態を表すので、話者の意志や想像、予測をも表す点で法的な意味を持っていると言える。

いう分析を可能とするようにも思われ、さらに考察が必要である。

[16] キナウル語の中動態接辞については、Takahashi (forthcoming) を参照されたい。

[17] 動詞 *dē-* は「～になる」という意味で使われるが、構文としては、「～が... に来る」という形になっている。「来る」という意味の動詞は *bɨd-* があるが、その違いは、*bɨd-* が直示中心への動きであるのに対し、*dē-* は直示中心の外での、到達点へ向けての動きであると言える。なお、*bī-*「行く」 は直示中心から外への動きである。

3　いわゆるモダリティを表す接辞

本節では、いわゆる「モダリティ」を表すが、時制接辞と同じスロットに入る接辞を記述する。意味的にはモーダルな接辞であると言えるが、形式的に時制と同じ分布を示すことは興味深い。

3.1　不確実

接辞 *-gyo* は、付加されている動詞が表す動作や状態が話し手にとって確実ではないことを表す。Sharma (1988) が遠過去や伝聞を表すとしていることは 2.2 節の末に述べたとおりである。

(12) *gɨ*　*tʰɨd*　*nē-**gyo**-k*　*ādarš*　*piō*　*bī-ts-a*　*ma-bī-ts*
I　what　know-UNC-1S　PSN　PLN　go-NT-QM　NEG-go-NT
'I do not know whether Adarsh will go to Peo or not.'

上の文では、*tʰɨd* がなければ、不適格になる。話者が「自分は何か知っていたか」と自問するニュアンスがあると思われる。たんに知らないと言っているのではなく、知らなかったことに気がついたような意味合いがあるようである。したがって、次に見るように過去と関連しているように思われる。

-gyo は、通常、過去を表すと意識されているようである。

(13) *dogō*　*piō*　*bī-**gyo**-š*　*tsaltsal*
they　PLN　go-UNC-3S(HON)　think:RDP
'I thought that they had gone to Peo.'

次例は、過去の事実について不確実である場合は *-gyo* が使えるが、未来に起こりうることでは *-gyo* が使えないことを示す。

(14) a. *gɨ*　*ǰu*　*līk*　*zōlā*　*raṅ*　*yun-im*　*han-**gyo**-k*
I　this　heavy　bag　with　walk-INF　can-UNC-1S
'I wondered whether I was able to walk with this heavy bag.'

b. *aṅ*　*goenē-s*　*ǰu*　*kuy-ū*　*taṅ-m-ā*　*byaṅ-to-š-a/*byaṅ-**gyo**-š-a*
my　wife-INS　this　dog-DAT　see-INF-COND　be_afraid-FUT-3S:HON-QM/be_afraid-UNC-3S:HON-QM
ma-byaṅ-i-š[18]
NEG-be_afraid-LV-3S:HON
'I wonder my wife would be afraid of the dog if she sees it?'

[18] *byaṅtoša mabyaṅiš* は選択疑問の形である。選択疑問は、疑問接辞の付いた動詞と否定辞の付いた動詞を並べることによって表される。(14b) では、前半の *byaṅtoša* が、未来時制の接尾辞、3 人称主語の接尾辞（敬語）に疑問を表す接尾辞が付いて終わっている。後半の *mabyaṅiš* は動詞語幹に否定の接頭辞が付き、時制を表す接辞無しで語幹に直接（つなぎ母音をはさんでいるが）人称接辞が続いている。否定形で時制が中和することは、第 4 節で見る。

(14b) は、妻が犬を怖がるという、まだ起こっていない事態についての陳述なので、*-gyo* は使えない。

3.2　反実仮想

反実仮想は接尾辞 *-tsa* によって表される。条件節の動詞にも、帰結節の動詞にも使われ、現実に反する仮定を表す。条件節で用いられる場合は、条件を表す接辞は *-tā* である (15)。反実仮想でなければ、(16) のように不定詞に *-ā* を付けて表す[19]。

(15) *gɨ*　*bārī*　*rupyā*　*ǰor-**tsa**-k-tā*　*gɨ*　*tībī*　*zog-**tsa**-k/*zog-to-k*
I　many　money　earn-SBJ-1S-COND　I　television　buy-SBJ-1S/buy-FUT-1S

‘If I got enough money, I would buy a TV set.’

(16) *ībraṅšoṅ*　*hunā*　*boā*　*kim-ō*　*nī-m-ā*　*aṅū*　*galyā*
if　now　father　house-LOC　exist-INF-COND　me(DAT)　anger

*ke-to-š/kēt-**tsa**-š*
give(1;2O)-FUT-3S(HON)/give(1;2O)-SBJ-3S(HON)

‘If Father were at home now, he would get angry with me.’

単純な仮定を表す *-ā* が不定詞に付いている (16) では、条件節での主語人称は動詞には表されていないのに対し、(15) では、条件節であることを表す標識 *-tā* が定形動詞に付加されている。このため、後者では、条件節自体が主語の人称を表すことができる[20]。

3.3　命令および要請

キナウル語動詞の命令形は、動詞語幹に直接 2 人称の主語接辞を付加することによって表される。すなわち、時制接辞のスロットには何も入らない。上記のように母音語幹動詞では、動詞語幹に直接人称接辞が付加される。過去時制の場合も、母音語幹動詞で人称接辞が直接語幹に付加されるため、2 人称では命令か過去かが、形式的には区別できないことがある。

(17) は、動詞語幹が直接文末に現れている。これは目下などに対する命令であって、丁寧な言い方ではない。

(17) *nu-pɨṅ*　*sad*
that:PROX-DAT　kill

‘Kill him.’

(18) は、動詞語幹に挿入母音をはさんで直接 2 人称主語接辞が付いている。この接辞は、単

---

[19] なお、反実仮想の条件節を表す *-tā* は *-ā* を含んでいるが、*-t+ā* のように分析する根拠は、今のところない。形式的には、強調を表す *-ta* という接辞に似ているが、関係は不明である。

[20] 通常、キナウル語では、定形に何らかの接辞が後続することは少ない。ただし、この接辞 *-tā* と疑問の接尾辞は例外的に人称接辞に後続する。他にもこのような接辞があるかどうかは今後の課題である。とくに、モーダルな意味を持つと思われる接尾辞が見られるが、今のところ明らかではない。

数の主語を表すので、1 人の聞き手に対する命令であり、(17) より丁寧な表現になっている。

(18) *labraṅ-u* *škwarā* *lan-i-ň*
temple-GEN going_round_clocwise do-LV-2S
'Go round the Buddhist temple in the clockwise direction.'

なお、(18) では、動詞語幹と主語人称接辞の間に母音が挿入されている。これを命令を表す接辞と取ることはできない。なぜなら、次節で見るように、動詞に否定辞が付加されて時制が中和する場合も、子音語幹では、母音 *-i* が挿入されるからである。

時制接辞のスロットに *-ri* が挿入されて、丁寧な命令または要請を表すことができる。

(19) *kišī* *ǰu* *tōpʰā* *kin* *boa-pɨṅ* *ran-**ri**-č*
you_two this present your father-DAT give(1;2O)-POLIMP-2S
'Please give this present to your father.'

動詞語幹に直接 1 人称主語接辞が付加され、さらに疑問標識が後続した場合、許可を求める表現になる。

(20) *ki* *ṭʰanḍī-s* *nī-m-ā* *kinū* *gɨ* *ǰu* *šel* *kē-k-a*
2PRN cold-INS exist-INF-COND 2PRN:DAT 1PRN this medicine give(1;2O)-1S-QM
'Will I give you this medicine, if you have a cold?'

これも、語幹に人称接辞を付加するという点では命令形と共通した形式であり、相手の指示（つまり命令）を求めるという点で意味的共通性があると言える。

4　否定文での時制の中和

キナウル語では、否定文で時制が中和する。すなわち、動詞に否定辞が付加されると、時制接辞が現れなくてもよい。

次の文では、文末の *marɨṅ* が否定辞を伴った動詞であるが、時制を表す接辞を伴っていない[21]。

(21) *riṅkū-s* *mē* *čʰukšit-tseyā* *mi-u* *nāmaṅ* *aṅū* *ma-rɨṅ*
PSN-INS yesterday meet-ATTR person-GEN name 1PRN:DAT NEG-say(1;2O)
'Rinku does not tell me the name of the person whom he met yesterday.'

Rinku が昨日彼の会った人の名前を教えてくれないと言っているが、時制接辞がないので過去の意味「教えてくれなかった」という解釈も可能である。

[21] この動詞には人称接辞も付いていない。3 人称主語の人称接辞は、敬意を表さないゼロか、敬意を表す *-š* のいずれかであって、この動詞に人称接辞がないのは、Rinku という人物に敬意が込められていないことを示す。なお、人称接辞を伴う場合、子音語幹動詞では、語幹と人称接辞の間に母音が挿入され、*marɨṅiš* という形式になる。

次の (22) は、主語が 1 人称であるため、動詞語幹に直接主語人称接辞が付いている例である。ただし、動詞が子音で終わっているため、語幹と人称接辞の間に母音 *-i* が挿入されている。

(22) *gɨ-s* *do-pɨṅ* *ma-taṅ-i-k,* *ṭ^{h}ūlonnā* *do* *bɨzar-ō-č* *omsī* *bībī*
1PRN-INS 3PRN NEG-see-LV-1S because 3PRN bazaar-LOC-ABL before go:RDP
ma-du-ē
NEG-COP-PT
'I couldn't see him, because he had left the bazar already.'

未来時制の接辞以外は、否定辞が付いていても現れることができる。すなわち、未来時制の否定形だけは時制接辞を伴わないのだが[22]、その他の接辞は否定辞と共起してその意味を明らかにすることができる。(23) は、*čē-*「書く」という動詞が否定形で未来時制接辞をとっていない例である。(24) は選択疑問文であって、「勉強するかしないか」という部分の後半で否定形が現れている。前半は未来時制となっているが、後半の否定形では未来時制を表す接辞を付加することはできない[23]。

(23) *gɨ-s* *kinū* *tsiṭ^{h}ī* *ma-čē-k/*ma-čē-to-k*
1PRN-INS 2PRN:DAT letter NEG-write-1S/NEG-write-FUT-1S
'I will not write you a letter.'

(24) *gɨ* *nasom* *guilae* *huš-o-k-a* *ma-huši-k/*ma-huš-o-k,* *zani*
1PRN tomorrow whole_day study-FUT-1S-QM NEG-study-1S/NEG-study-FUT-1S I_do_not_know
'I am not sure I will study the whole day tomorrow.'

(25) は、過去と現在の否定文で時制が中和していない例である。むろん、(25a) では、時制が中和した *masačik* でもよい。

(25) a. *gɨ-s* *mē* *kinū* *ma-sa-č-e-k*
1PRN-INS yesterday 2PRN:DAT NEG-kill-1;2O-PT-1S
'I did not kill you yesterday.'

b. *torōmyā* *ramēš-ɨs* *kamaṅ* *ma-lan-udū,* *t^{h}ūlonna* *do* *ṭoṭō* *du*
these_days PSN-INS yob NEG-do-PR because that be_ill:RDP COP
'These days Ramesh does not work, because he has been ill.'

時制接辞が現れないという点では、前節の命令形の場合と同じであるが、モーダルな意味を持つ接辞は否定形でも中和せず現れるので、時制を表す接辞との間に分布の違いがあることを示している。

---

[22] なお、未来時制接辞が決して否定形にならないわけではない。未来時制接辞と否定接辞の共起については今後の課題である。

[23] むろん、文全体がたとえば過去であれば、ここで過去形を使うことができるので、文脈によってわかるから未来形が使われないということではない。

5　おわりに

本稿では、キナウル語の時制接辞スロットに現れる接尾辞を記述した。いわゆる時制である現在、過去、未来を表す接辞の他に、モーダルな意味である不確実（基本的には過去の意味を持っていると考えられる）、反実仮想（時制としては中立）、要請という意味を持つ接辞がある。命令では、時制接辞スロットに入る接辞はない。また、否定形では、時制を明示する必要がなく、中和する。

キナウル語の時制を考える際、時制接辞として考えられる形式と、時制の意味を持っている形式とは区別されるべきである。基礎的な区別がなされた上で、時制体系について議論できると考えるものである。

略号表

1	1 人称	INF	不定詞	PROX	近接
1;2	1 人称または 2 人称	INS	具格	PSN	人名
2	2 人称	LOC	位置格	PT	過去
3	3 人称	LV	つなぎ母音	QM	疑問標識
ABL	奪格	MDL	中動態	RDP	重複
ATTR	連体形	NEG	否定	S	主語
COND	条件	NT	中立時制	SBJ	仮定法
COP	繋辞動詞	O	目的語	STT	状態
DAT	与格	PL	複数	TNS	時制標識
FUT	未来	PLN	地名	UNC	不確実性
GEN	属格	PR	現在	VS	動詞語幹
HON	敬語	PRN	代名詞		

参考文献

Sharma, D. D. (1988) *A Descriptive Grammar of Kinnauri*. Studies in Tibeto-Himalayan Languages 1. Delhi: Mittal Publications.

髙橋慶治 (1999) 「キナウル語の記述的研究」『チベット分化域におけるポン教文化の研究』文部省科学研究費補助金研究成果報告書（代表者: 国立民族学博物館教授　長野泰彦）、pp. 199–213. 大阪: 国立民族学博物館.

Takahashi, Y. (2001) ‘A descriptive study of Kinnauri (Pangi dialect): a preliminary report’ In Nagano, Y. and LaPolla, R. J. eds., *New Research on Zhangzhung and Related Himalayan Languages: Bon Sudies 3*, Vol. 19 of *Senri Ethnological Reports*, pp. 97–119. Osaka: National Museum of Ethnology.

Takahashi, Y. (2004) *A Descriptive and Morphosyntactic Study on Kinnauri*. A report of Research Project, Grant-in-Aid for Scientific Research (C), #12610556, 2000–2003.

Takahashi, Y. (2008) *A Descriptive and Morphosyntactic Study on Kinnauri (2)*. A report of Research Project, Grant-in-Aid for Scientific Research (C), #16520250, 2004–2007.

Takahashi, Y. (forthcoming) 'On a suffix of middle voice in Kinnauri (Pangi dialect)' In Nakamura, W. and Kikusawa, R. eds., *Objectivization and Subjectivization: A Typology of Voice Systems*. Osaka: National Museum of Ethnology.

髙橋慶治(forthcoming). 「キナウル語の述部構造について」澤田英夫（編）（書名未定）. 20 ページ. 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.